

実践的推論活動の三位相

——エスノメソドロロジーのトピック——

好井 裕明

我々は、日常的自明性のもとでは、安定した社会構造感（言わば“世間”）をもっている。この社会構造感、常に応用実践的な諸目的に適うよう行なう我々の推論活動を通して達成される。そして、この活動自体に内在する論理、“秩序化”装置をトピックとするのがエスノメソドロロジーである。本稿では、このトピックに焦点を合わせ、これまで呈示されてきたエスノメソドロロジー的分析の紹介・整理を行い、“エスノメソドロロジーは何を明らかにしているのか”に関する一般的呈示を試みる。

1. 課題

最近になって、ようやくエスノメソドロロジーに関する論考が出始めた（山田富秋〔1980〕〔1981〕〔1982〕山崎敬一〔1982〕〔1983〕北沢裕〔1982〕）⁽¹⁾。これらの論考はいずれも膨大にあるエスノメソドロロジー文献の正確な理解に基づく労力作であり、エスノメソドロロジーの理論化、分析過程の内的論理構造さらにはエスノメソドロロジーの世界観、人間観に特有な諸概念—「インデックス性 (indexicality)」⁽²⁾「相互反映性 (reflexivity)」⁽²⁾「日常的規範定立活動としての会話的相互作用の意味」「秩序形成メカニズムにおける自然言語 (natural language) の重要性」「成員の推論活動と開放項 (et cetera clause) 概念の関係性」⁽³⁾等—の検討を呈示する。加藤春恵子が紹介するように、“エスノメソドロロジー”という言葉は、研究対象、研究方法、研究者集団の思潮、批判的科学観等の様々な意味合いがこめられて用いられている⁽⁴⁾。そして上述の諸概念の精緻な検討は、このような多様な意味合いを整理し、エスノメソドロロジーの正確なる日本への紹介・導入の過程で回避し得ぬ有意義な作業である。またエスノメソドロロジー自体の現実分析装置としての存在証明（エスノメ

ソドロロジーを従来の社会学理論・調査から差異づけ、そのうえで両者を関係づける）過程に対する意義は言うまでもない。しかし、これらの論考の意義を充分認めるとしても、現在日本においてエスノメソドロロジーの一般的呈示がうまく行なわれているとは言い難い。諸論考は、“或る程度エスノメソドロロジー文献を読み、エスノメソドロロジーとは何かを把握している人々にとって、理解し易いが、全く知らない人々にとっては、極めて難解で、今一つエスノメソドロロジーの社会学理論・社会学調査に対する有効性が伝わってこない”のである。現状では、エスノメソドロロジーは、日本社会分析の為の社会的装置としての“市民権”をまだ殆んど獲得していないと言える。

筆者は、エスノメソドロロジーをめぐる課題として大きく次の3つを考える。(1)外的整理・批判を通じた一般的呈示、(2)内在的検討によるエスノメソドロロジー的一般社会学理論の構築、(3)日常生活諸現象への調査実践の試行、である。本論考では、これまでエスノメソドロロジーの名のもとに記述・分析されてきた内容を、そのトピックを中心として紹介・整理し、エスノメソドロロジーの見取り図の作成を試みる。これは、

(1)の一般的呈示の課題に見合う作業の一つである。

エスノメソドロジーは、(1)成員によって“生きられた”諸現象の“秩序化”に内在する論理の理論化に努める。その意味で従来の「秩序問題」のパーソンズ的解決に対するコペルニクス的転換とも言える新たな視角の提供が可能な社会理論として、(2)成員の“状況的”秩序達成に注目し、その“状況”をデータ収集の基本場とするうえで、具体的な諸社会問題に対する調査実践の為の“方法的態度(G. Psathas〔1980〕)”として、有効である。そして、本論考は、筆者自身がエスノメソドロジーの理論化・調査実践を今後進めていく行程におけるほんの最初の数歩なのである。

2. エスノメソドロジーの基本仮説

ガーフィンケルは、パーソンズから「秩序問題」の重要性を、シュッツから「日常生活世界論」「レリバンス(Relevance)問題」を、フッサールから「現象学的視座」を受け継いでいる⁽⁵⁾。そして彼にとって“何故秩序が生ずるのかを日常生活世界の位相まで含めて、合理的に説明する”のではなく、“社会成員が、日常生活の諸場面で、状況との常なる関係性達成を通して、如何にして秩序の“正常性”を維持しているのか”が基本的問題関心となる(H. Garfinkel〔1952: chap. 3, 4〕)。我々は、普段別に疑問を抱くこともなく、諸生活場面で、各場面に応じた適切な発話・行為をしつつ、支障なく生活している。だが、この“支障のなさ”の背後に様々な重大な問題を孕む事実が隠されている⁽⁶⁾。あたりまえに状況を認知し、発話・行為が可能なのは、我々が「自然的態度」(フッサール)のもとで、その“あたりまえ”性を維持しているからである。即ち我々は、日常的相互作用に

おいて、発話・行為の意味を伝達していると同時に、意味の“適切性”“正常性”をも達成し、また各状況を多元的現実内に位置づけるのに適切な「社会構造成感(a sense of social structures)⁽⁷⁾」をも達成しているのである。そしてガーフィンケルは、日常生活諸場面の人為的な破壊の実験を通して、この“あたりまえ”性が、常に当事者間で維持されている“流れ”であることを例証した。(H. Garfinkel〔1967: chap. 1, 2, 3〕)

〔仮説1〕

日常的諸場面での現実とは、固定化され、安定した“社会的事実(social fact)”ではなく、生活者が常に達成する「一つの現象(a phenomenon)」である。(Zimmerman & Pollner〔1971〕)

エスノメソドロジーにおいて、生活者は、各場面での固有の“社会的事実”性を達成する能力を有する。即ち自己そして他者に対して、現実を解釈・説明し得る能動的な存在として捉えられる(Mehan & Wood〔1975a〕)。この能動性は、「実践的(社会学的)推論活動(practical (sociological) reasoning activities)⁽⁸⁾」を通して発現される。我々の日常的現実とは、単に時間的な過去から蓄えられた「知識ストック」に依るだけでなく、固有の現在における解釈・説明活動即ち実践的推論活動を通して構成される。つまり、普段我々が相手のしていることが分かり、相手が自分の意図する行為をその通りに理解したり、しなかったりするのとは、知識ストックの諸項目との照合によるだけでなく、照合を可能ならしめる解釈・説明装置を我々が用いているからである。この装置は、現実構成の為に必須であり、それを「人々の方法(ethnomethods)」と呼ぶ。エスノメソドロジーで扱う具体的現象は、この「実践的推論活動」であり、その精緻

な解説を通して「方法」を抽出する。

〔仮説2〕

生活者は、「実践的推論活動」を通して日常的諸現実の意味の一貫性を保持する、即ち“秩序化”を達成する。そして、この活動を可能にするのが「人々の方法(ethnomethods)」である。

生活者の現実を“秩序化”する「方法」は彼／彼女に対して、当該現実を“意味あるものとして立ち現わせる”(formulate)深層規範と言える。「方法」からの逸脱は、強力な道徳的サンクションを受ける可能性がある。「方法」の使用は、他の生活者との共同的現実構成の点からみて、状況超越的要請である。しかし、「方法」自体は常に個々具体的状況と生活者との関係性の中で、局域的に(locally)用いられる。つまり、“今—ここ”での“秩序化”は固有の「方法」を用いて達成されるが、その「方法」の再使用は他者との共同性において保証されており、「方法」は状況依存적であると同時に状況超越的、普遍的性質をおびる(Sacks, Schegloff & Jefferson〔1974〕)。

〔仮説3〕

「方法」は、他者との共同性を前提としており、状況依存적であると同時に普遍的性質をおびた知識の規範的使用である。

普段、他者との発話・行為は、基本的に我々と相手との交代をくり返すうちに“秩序化”される。この交代を通して初めて我々の発話・行為に一定の意味付与がなされ得る。「方法」の使用自体が、このような生活者間の時間的流れに沿った連続的・継起的な発話・行為の交代に規定される。例えば、“こんにちは”という発話自体も、それが挨拶として我々に立ち現われるのは、相手の次の発話との継起的な関係の中においてである。比喩的に言えば、“こんにち

は”の発話が、次の発話に対して或る枠(slot)をおき、そこに入るべき項目(item)を予期させ得る。故に相手の“こんにちは”は初めの挨拶に対する応答と聞かれ、相手の沈黙は、枠に入るべき項目の欠如であり、例えば、挨拶に対する無視さらには我々への軽蔑として聞かれ得る。この“秩序化”の継起性は、エスノメソロジーにとって根本的現象観である。

〔仮説4〕

日常的現実の“秩序化”は、常に継起的連続的に達成される。そして「方法」自体も、この継起性に規定される。

3. 3つのエスノメソロジー的トピック

さて、上述の如き基本仮説をもとにして、様々なエスノメソロジー的分析が、これまでに呈示されている。一見すると、それぞれが“独自のエスノメソロジー”を主張し、日常的諸現象を分析しているように見える。だが、これらの分析に、“何を明らかにしてきたのか?”という、その探究対象の点から検討を加えると、大きく3つに分類が可能である。即ち「成員の実践的知識項目の抽出」「状況構成的諸規範の記述」「自然言語による“秩序化”装置の再構成—会話分析—」がそれである。前二者は、或る特定状況下での分析に限定されており、その意味から「状況的アプローチ(Situational Approach)」と呼ぶ。これは、「成員の方法(ethnomethods)の記述」が重視され、言わば「ethnomethodography」(Zimmerman & Pollner〔1974:80-103〕)と呼び得る。それに対して、「会話分析」は、分析データとしては特定場面でのミクロな自然的会話を扱うが、状況超越的、或る言語社会での共通な普遍的・不変的“秩序化”装置を志向している。前二者とは異なるものであり、狭義での「成員の方

法の学」即ち「ethnomethodology」と呼び得る。以下、各アプローチを詳しく見ていこう。

(1) 実践的知識項目の抽出

特定集団の成員は、集団内の凝集性、集団外の諸環境との円滑な関係性達成と言った、成員にとって有意味な集団自体の立ち現われを維持させるうえで、成員間でのみ利用可能な（available）特定の知識を使用する。それは、成員間で自覚的、意識的に用いられている場合もあるし、全く自明的に、“用いているが気づかれていない”場合もある。しかし、いずれにしても、集団外成員にとって、普段は、即ち「日常生活の自然的態度」のもとでは、そのような知識は、隠されており、見えないものである。例えば、警察官が、各自担当区域の巡回活動において、その区域の平穏維持に努める際、不審な人物や家屋の異常な状態に気づき、“何か変だ。普段とは違うな”と感じとること自体、警察官が、巡回区域の“正常なる”姿の認知マップという特定知識（例えば“この酒屋は、普通夜10時を過ぎれば店を閉めているはずだ”とか、“あの家は、11時を過ぎれば全員が寝て、灯りが消えている”という知識）を実際に使用しつつ巡回していることを裏づけるものと言える（E. Bittner〔1967〕）。そして、このような、成員間で使用される実践的知識項目を、長期的な参与観察等を通して、発見し抽出していく作業を、エスノメソドロジ-的と名づけた分析が存在する。Psathas と Henslin の「タクシードライバー配車指令の分析」、R. Ramos の「貧困家庭の相互作用的戦略の研究」等がそうである（Psathas & Henslin〔1967〕、R. Ramos〔1979〕）。

タクシードライバーが、普段、街を流している時、直面する問題は、“人と場所の所在を確

定する活動（locating activities）”である。Psathas と Henslin は、この“所在確定活動”に焦点をあてる。直接の分析対象は配車指令であり、これは、電話によるタクシーの申し込みを会社の配車係（dispatcher）が、無線を通して短いメッセージでドライバーに伝える指令のことである。配車指令の諸要素、それらが伝える意味の考察を通して、彼らは、“何が、所在の確定（locating）を構成しているのか”“或る指令を受けるとき、ドライバーは、それを、場所と人を確定する為に何をすべきかを示す一連の指示として、如何に理解しているのか”を明らかにする。つまり、「所在の確定活動の一つの側面は、場所や人を確定することに関わる指令のコーディングとデコーディングを含んでいる。……（中略）……そのような指令の構造と内容を分析することによって、所在の確定についてのコミュニケーションに対して、日常生活における社会的に能力ある成員が用いた基準を発見することができる。そして、指令を有意味化する為に最小限必要な要素の発見と、そのようなコミュニケーションが生ずる社会的文脈の洗練は、如何にして、その活動が現実に遂行されるのか、への何らかの洞察を提供し得る。」（Psathas & Henslin〔1967:427〕）

指令自体は、(a)町名、(b)通りの名前と番数、(c)交差点、(d)場所の名前、(e)場所の特徴、という“場所の特定化”の要素と、(f)かけつけろ、そして見回せ（Drive-up-and-look-around）、(g)かけつけろ、そして（車から）降りろ（Drive-up-and-get-out）、(h)乗客の名前、(i)乗客の特徴、という“乗客の特定化”の要素から構成される。彼らは、この要素をさらにA.通りの名前、B.場所の特徴、C.乗客の特定化に分け、配車指令構造の7つの類型を抽出している⁽⁹⁾。これらの指令構造の類型は、彼らが前もって仮定

していた訳ではない。彼らは、ロサンゼルス
の或るタクシー会社での一年間にわたる参与観察
(実際にタクシーに同乗し配車指令を録音したり、
指令に応じたドライバーの活動を観察したり…)
を通して、類型を現場から抽出した。そして
個々具体的な指令の組み合わせの意味の解釈は、
参与観察から得たロサンゼルスに関する知識、
指令で示された特定の場所の知識、タク
シードライバーの世界に関する知識と言った現
場でドライバーが用いている知識を基礎にして
いるのである。

さてRamosは、日常生活の中で(勿論、調査
実践の中も含めて)自然的に生起するトラブル
に注目し、そこから成員間で用いられる「背景
的知識(background knowledge)」を読みとろ
うと試みる(Ramos〔1972: chap.1〕)。これ
は、ガーフィンケルが初期の頃に用いた方法、
つまり人為的にトラブルを生起させて、日常的
自明性を揺り動かすことで、「秩序化」の様相
を暴露する方法に対する批判である。彼は約一
年間メキシコ系アメリカ人の貧困家庭の調査を
行うが、その過程で、対象家庭の両親が文盲で
あることを偶然知る。数週間後、両親と福祉ケ
ースワーカーとの対話を観察する機会を偶然得
るが、彼らは文盲であることをケースワーカー
に悟られぬ様に、あたかも読み書きができるか
の如くに自己呈示する「相互作用上の戦略」を
用いていた。父親が書類を受けとり、注意深く
読んでいる風に見せ、その後で母親に渡し、彼
女も同様にした後で「誰がサインしても構わな
いのか」と問い、実際に彼女がサインしたので
ある。このサインの仕方は、彼らが書類内容を
読み、十分に理解した上で行ったという印象
を与え、ケースワーカーもそう理解して、相互
作用は完了したのである(R. Ramos〔1979〕)。

Ramos自身は、この体験から、従来の仮説構

成・分析枠組先行型の社会調査を批判し、調査
実践における“状況的偶発的諸要素(その主た
るものとしては、調査者の計画外の思わぬトラ
ブル)”の意義を主張する。つまり彼が、両親
の文盲を知るのも、調査計画外の出来事からで
あるし、「相互作用上の戦略」の存在を知るの
も同様である。そして調査者さらには調査計画
と“状況”との柔軟なインタラクトを重視し、
その過程で発見される成員の使用する“常識的
知識”の獲得作業を、Ramosは、エスノメソド
ロジー的であると言う。ここで押さえておきた
いの、Ramos自身の調査方法論批判よりむ
しろ、自然的トラブルを通して、対象の家族成
員以外には普通は知り得ない“両親の文盲”と
いう事実を知り、その事実から、両親が外成員
に対して用いる自己呈示の“方法”の存在を知
る、という彼自身の体験の呈示である。

(2) 状況構成的諸規範の記述

我々は、日常において特定集団や状況を“揺
るぎなき現実”、客観的不変的構造を持つ外在
的対象として感得し、行為する。このような“社
会的事実(social fact)”性は、当該状況での
発話・行為の中で、状況固有の構成的諸規範や
知識を成員同士が語り合うことを通して達成さ
れる。構成的規範とは、当該集団や状況内で成
員が、それらとの“正常なる”相互作用を維持
し、集団や状況を自らの日常生活の自然な流れ
に位置づける為に用いる規範のことである。つ
まりこの規範の使用を通して、成員は、自らの
“秩序立てられた社会構造成感”の一要素として、
当該集団や状況を自然的に意味付与し得るので
ある。このような規範は、原則的に外から与え
られることはなく、成員間で常に達成され、対
等に配分されている。そして規範の違反には、
“正常なる”状況構成を回復する為に、他成員

からの道徳的サンクションが与えられるのが普通である。構成的規範は、何らかの形でコード化(即ち日常言語の短い文章となっていること)されている場合が多く、“規範的知識を語り合うこと(互いに規範を使用し、当該状況の秩序を達成しているのを確認すること)”は、エスノメソドロロジーにとって優れて意味のある現象である。状況構成的諸規範の記述の事例としては、L. A. Wieder「罪人コードを語ることによる秩序化」、H. Mehan「教室授業の秩序化装置」、好井裕明「成員の“秩序化”実践の記述」等があげられる(L. A. Wieder〔1974〕、H. Mehan〔1979〕、好井裕明〔1982〕)。

Wiederは、仮出獄を許された麻薬中毒患者矯正センターでの参与観察を通して、スタッフと収容者間で用いられている知識システムに出会う。「罪人コード(the convict code)」とは、センター管理維持の為に公的に表示され得る知識システムではない。スタッフと収容者が、日常的相互作用を正常に“秩序化”する為に、相互作用の過程で現実に用いられ達成されているコードである。Wiederは、スタッフや収容者の会話で用いられる現地語から要約し直し、

1. とりわけ告げ口だけはするな。
2. (いやな仕事や約束などから)手を引くな。
3. 他の収容者をあてにするな。
4. 持っているものを分かちあえ。
5. 他の収容者を助ける。
6. 他の収容者の利益を邪魔してはならない。
7. スタッフを信用するな。
8. あなたの誠実さを収容者に示せ。

と定式化している(Wieder〔1974:115-118〕)。「罪人コード」の呈示は、社会学者が、しばしば“インフォーマル規則”“逸脱の下位文化”の存在を記録する仕方と似ていると言える(Mehan & Wood〔1975:139〕)。そして、

従来の社会学的分析では、このようなコードは、矯正センター内での逸脱行動の説明装置として用いられるのである(Wieder〔1974:chap.4〕)。

だがWiederは、説明装置としてではなく、コード自体の達成の仕方、即ち“スタッフと収容者が如何にして、日常的諸活動を“秩序化”する為に、コードを[・]実[・]際[・]用[・]い[・]て[・]い[・]る[・]の[・]か”を焦点化する。「コードは、それが意図的に描いている場面の‘外側’で出会われるのではなく、場面の中で或る活動的な結果生ずる行為として明示されることによって、場面の持続的で結びついた部分として、その場面で語られる。矯正センターでのコードを喚起させる会話は、コードを言及しており、或いはその理解可能性コードに頼っているが、コードは、矯正センターでの生活の単なる記述ではない。そうではなく、このような会話は、同時に矯正センターでの生活の部分なのであり、コードが正当性を与える物事の範囲内に含まれる部分なのである。コードを含んでいる会話が、その生起の場面状況の中で相互反映的(reflexive)であるのは、このような意味においてである。」(Wieder〔1974:166〕傍点は引用者)即ち、コードと使用状況は“相互に決定的(mutually determinative)”であり、コードが活動を決定すると同時に、活動がコードを達成するのである。Wiederは、矯正センター成員間でのコードの現実の使用、即ち“コードを語ること(telling the code)”を詳述するが、MehanとWoodは、その2つの特徴を相互作用的特徴と相互反映的特徴と呼ぶ(Mehan & Wood〔1975b:139〕)。前者の特徴とは、“コードを語ること”は、場面状況を単に記述するだけのものではなく、それは、特定場面状況での諸々の結果可能性を指示する(index)一つの実践的発話行為であるということをする。後者は、“コードを語ること”は、

当該場面状況と常に“相互に決定的”であるが、成員が“コードを語ること”を通して、コードの“正常性”“適切性”を達成し、コードの“客観性”“外在的拘束性”即ち、規範としてのコードの“社会的事実”性を認知していることをさす。

社会的現実の規範的説明は、何も専門的社会学者に限られた説明形式ではない。成員が、日常的諸活動を“秩序化”する際にも、このような形式を用いている。ところが、コードの“社会的事実”性は、実践的目的に適うよう、常に実際の場面で達成されつつあるもの(on-going accomplishment)である、という点で、専門的社会学者の用いる規範とは決定的に異なるものである。そして、Wiederが、現実のコード使用を観察して理解したことも、「収容者の行為が秩序立てられ、首尾一貫した現われを見せるという事実は、相互作用の中で、スタッフや調査者に対し、“コードを語ること”を通して、“収容者の立場”から矯正センターの環境を見る為の“深くくみこまれたインストラクション(embedded instructions)”を与える、収容者が常に実際に達成しつつあるものなのであった」(Wieder〔1974:220〕)ということである。

ところで、このような“コードを語ること”という“秩序化”は、センターという限られた空間内での成員間の相互作用そのものを見ることによって初めて理解される。その意味において、“コードを語ること”は、センターの外部的諸要因や、スタッフ、収容者の心理的屬性、社会経済的地位と言う要因だけでは、説明し尽くし得ない現象であることに注意しておきたい。

Mehanは、学校教室での授業における“秩序化”の問題を扱う(Mehan〔1979〕)。教室という限られた状況の中で、生徒にアカデミック

な知識を伝達し、授業目的を円滑に達成すること、即ち教室での秩序問題は、教師の実践的問題関心でもあり、授業管理の点から様々な分析がなされている。しかし、これらの分析では、生徒の背景的諸要因(人種、家庭の社会経済的地位、居住環境等)、教師の特性、学校の特性と言った要因に訴えられており、日々の授業の中で、教師と生徒が如何にして相互作用を達成し、授業自体を成立させているのか、の詳細な観察・分析はなされていない。確かに上述の諸要因が関連することは仮定できるが、授業の“秩序化”は、そのような要因だけでは説明し尽くし得ない。

Mehanは、小学校での授業をビデオに収め、詳細な検討から、教師と生徒が教室という場で、“授業”を達成するのに用いる“秩序化”装置を明示する。この装置は、教師や生徒は既に知っているが、これまで気づかれなかった情報である(Mehan〔1979:173〕)。さて授業は基本的に、問いかけ-応答-評価(Initiation-Reply-Evaluation)連鎖から構成される。教師が生徒に対して質問し、生徒が答えその答えに対して、教師が評価を加える。この連鎖的組織化(教師と生徒間の秩序立てられた相互作用の進行)を可能ならしめるのが、「順番配分装置(Turn-Allocation-Machinery)」(Mehan〔1979:81〕)である。この装置は、(1)基本的順番配分手続き(the basic turn-allocation procedures)と(2)即興的戦略(improvisational strategies)から成る。(1)は、正常な授業環境のもとで機能し、(i)個人を名指すこと(individual nomination)、(ii)発言権獲得努力の促し(invitation to bid)、(iii)応答の許可(invitation to reply)に分節化される。このような手続きは、授業の“正常性”を維持する為に教師と生徒が気づくことなく用いている規範であり、手

続きによって、教師の質問内容に対する応答が“正しい”予期された応答の“場”に位置づけられ、応答内容の正しさも保証されることになる。そして、この予期された形式に**応答が違反するとき**、この手続きが**現実**に働いていることが明らかになる。ところで、塾などで筆者自身、子供を教えていて実感する様に、必ずしもこのような(1)の手続き違反に対して、**顕在的なサンクション**を与えることはない。そして、この“**サンクションを受けない違反**”を、教師が如何に処理するのかという疑問に関わるのが、(2)の**即興的策略**である。Mehanは、(i)無視すること(the works of doing nothing)、(ii)(違反或いは困難を)うまく切り抜けること(getting through)、(iii)予期されざることの変容(accepting the unexpected)、(iv)発言権を開放すること(opening the floor)という4つの戦略をあげている。

ところで、この「**順番配分装置**」は、如何なる授業においても、“**普遍的**”“**客観的**”に存在する「**装置**」と断定し得ないし、さらに Mehanが呈示した結果を基にして、精密な分析、「**装置**」自体の洗練が可能である。つまり、この分析は、分析状況に反映され初めて意味をもつものであり、“**完了された**”分析ではない。先述した様に、**教室状況**と他の**外部的諸要因**との関連も無視しており、その意味でも**限界性**がある。しかし、このような「**装置**」は、**教師と生徒間の相互作用**自体の精密な**エスノグラフィー**とそれを基にした考察以外からは決して見えてこない**状況構成的規範**であり、このような“**秩序化**”実践の記述は、従来の授業分析を補完する有意義な作業である。⁽¹⁰⁾

(3) 会話分析

一定の言語社会の**成員**である我々が、日常言

語即ち**自然言語**を用いた**発話行為・記述**を、それ自体特定の**意味**を有する**発話行為・記述**として理解し、**現実構成**を行なうという**事実**は、**社会学**にとって極めて重要かつ**驚異すべき事実**である。しかし、“**言葉を語り、語られた言葉をそれ自体のものとして理解すること**”は、これまで**社会学的説明**の**為のリソース**として**暗黙の裡**に用いられるのみで、この**事実**自体の**内的構造**やそれが果たす**全体社会の秩序形成**への意味は検討されることはなかった。H. Sacks とその後継者達「**会話分析**」派の**エスノメソドロジスト**は、この**明白な事実**を**探究の中心的トピック**に据える。つまり、彼らにとって**求められるべきものは**、「**成員たちが、成員たちに対して、それ自体として認知され得るような仕方**で、**行なうあらゆる活動**が、**どのようにして行なわれ**さらに**認知可能なふうに行なわれるのか**を提供する一つの**装置**」(H. Sacks〔1972〕)である。そして、このような**装置**を**探究**する場合、**何故成員は或る発話行為を行うのか**ではなく、**如何にして成員同士言葉を語り合うのか**、**如何にして先に述べた人の言葉を次の人が聞き、それを受けて言葉を語り返すのか**、**或いは先に言葉を述べた人が、次の人の語るのを聞き、既に与えた自分の言葉に対する意味を修正変更して、相手との関係性を再び組み直すのか**、という**会話的秩序形成の継起的特性**への**関心**から**自然的会話を考察**することになる。端的に言えば、**自然的会話達成**の“**自然性**”を**保証**する**形式的“秩序化”装置**を**成員**が用いていることによって、初めて彼らの**実践的推論活動**が可能となり、**成員**は**安定した「社会構造成感」**を達成し得る。その**装置の使用**は、一定の**言語社会**における**道徳的要請**をみたまものであり、**装置の誤使用**に対しては、端的に、**無意味・無秩序の応酬**(即ち、**言いたいことが相手に伝わらないし、相手の言**

うことが自分に理解できないこと)という強力なサンクションが与えられる。その意味において、この“秩序化”装置は、実践的推論活動の最も核心に存ると言える。

会話分析のトピックは、大きく(1)成員のカテゴリー化の問題と(2)自然的会話の形式的構造の問題の2つに分けられ得る。最近の傾向では(2)の分析が進み、「発話順番取得システム(Turn Taking System)」「隣接的連関対(Adjacency Pair)」「呼びかけ-応答連鎖(Summon-Answer Sequence)」「会話終結部門の構造」等々数多くの装置が呈示されている(H. Sacks, E. Schegloff & G. Jefferson [1974], E. Schegloff & H. Sacks [1973], E. Schegloff [1972a][1972b], J. Schenkein [1978])。このような装置の詳細な紹介は、山崎敬一が行っており、繰り返しを避ける為、彼の論考を参照していただきたい(山崎敬一[1983])⁽¹⁾。以下は(1)の成員のカテゴリー化に関して述べていく。

Sacksは、1966年の講義の中で、成員の日常的な言語カテゴリーの使用に注目する。それは単に現実を区分けする手段ではなく、或る意味で如何に彼らが固有の現実を認知・達成しているかの一つの仕方である。「カテゴリーの大半(女性、老人、ニグロ、ユダヤ人、ティーンエージャー等)は、普通、集団について語られるという意味で、決して集団そのものではない。しかし、我々が持っているものは、カテゴリーごとについて知られた知識の塊である。即ち、何らかの成員は、それぞれのカテゴリーの代表者として見られ、或るカテゴリーの事例である人間は、そのカテゴリーの成員として見られるのである。……結果として、人間は、このようなカテゴリーのまわりに社会統制(social control)のシステムを、規則正しく築き上げ

る。そして、これらのカテゴリーはその成員によって内的に(internally)強化されている。」(Sacks [1979:13])

集団成員が自己同定の為に使用するカテゴリーの独立性を主張し、彼らの現実達成行為としての言語カテゴリーを強調する場合、社会変動にとって重要な問題は、カテゴリーの独立性に対する内的管理装置の抽出であり、「多様なカテゴリーの集合、それらの使われ方、カテゴリー構成要素についての知識、カテゴリー適用規則の変化、カテゴリーの属性の変化」(Sacks [1979:14])に関係する。集団内言語カテゴリーやその使用実践それ自体を社会学のトピックとしたことは、少なくとも2つの意味で革新的である。一つは、ガーフィンケルが呈示した“従来の規範的秩序モデル、外的説明的な秩序モデルから、成員の方法(members' methods)を用いた成員による秩序達成という reflexive なモデルへ”という秩序問題に関する視座転換で述べられた「成員の方法」を経験的に分析する為のより明確な指針を与え、対象を明示化したという意味である。今一つは、支配的文化に対抗する、或いは何らかの形で突出したり、支配的文化を再検討せんと努めている諸集団で用いられる特有のカテゴリーの分析や成員間で維持強化されている現実達成の仕方の抽出作業は、支配的文化に埋没している日常生活者に“文化、常識へのとらわれ”を気づかせ、言わば文化的解放への一つの契機を与える可能性を有するという意味である。だがSacks自身は、集団内カテゴリーの成員にとっての実践的な意味を問う分析へ志向せず、第一の方向性のもとに、成員のカテゴリー化の形式的な秩序形成装置の構成を行う。

Sacksは、「赤ん坊が泣いた。ママが赤ん坊を抱き上げた。(The baby cried. The mommy

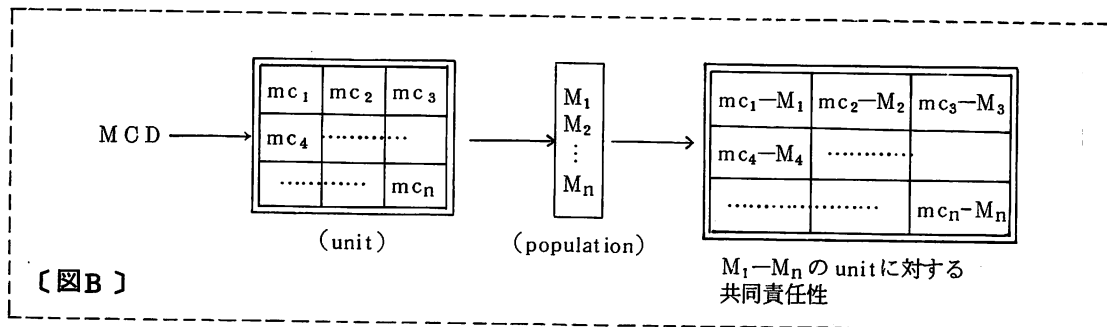
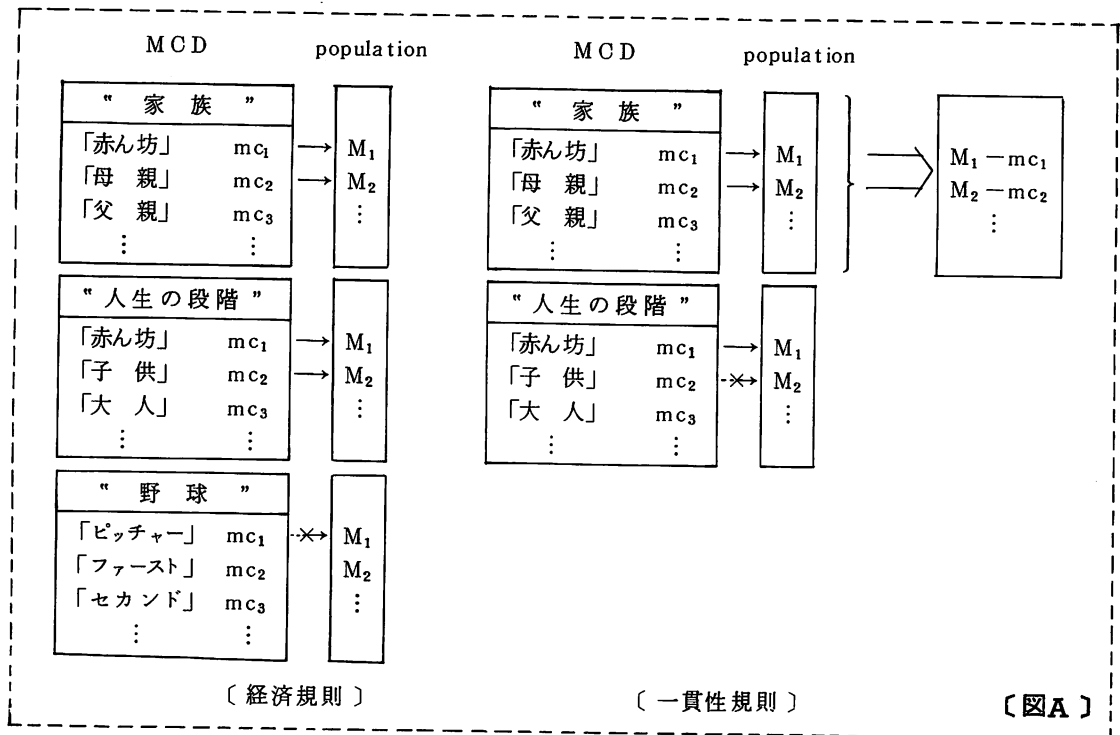
picked it up.)」という発話を普段我々はどのように理解可能なものとして聞くのかについて、5つの観察を呈示する。(Sacks〔1972〕)第1にまず、我々は、「赤ん坊」を抱き上げた「ママ」を、その赤ん坊の母親であると聞く。第2に、我々は、少なくとも同一社会の他の成員達(natives)の多くも、そのように聞くであろうと確信する。第3に、我々は、発話された2番目の文章(S₂)が、最初の文章(S₁)に従うように、2番目の出来事の生起(O₂)は、最初の出来事の起(O₁)に従うと聞く。第4に、我々は、O₂はO₁の故に生起する、即ちO₂の生起に対する説明はO₁が生起したことであると理解する。第5に、そこで語られていた赤ん坊や母親が、どのようなものであるかを知らずとも、我々の多くは、第1から第4の観察で示されたことを全て実践し得る。これらの観察は、我々が、或る社会の成員として、日常生活の“自然的態度”のもとで、実際に行うことであり、そのような実践には、我々に“言葉で語られていること”が、成員にとって生起しつつある現実の“正しい”記述であると認知可能にさせる装置が働いており、それが「成員のカテゴリー化装置(Membership Categorization Device)」(MCDと略記)なのである。

さてMCDは、①少なくとも1つのカテゴリーを含んだ成員カテゴリー(membership category(mc))の集合であり、②1人以上の成員に適用され、③適用の諸規則の使用を通して少なくとも母集団の1人の成員と或るMCDの要素(mc)とを対化(pairing)する装置のことである。そして、その適用規則とは、(1)経済規則(the economy rule)即ち、何らかのMCDからの或る単一のカテゴリーは、適切に或る人間を指示し得るという規則と、(2)一貫性規則(the consistency rule)即ち、或る母集団が

カテゴリー化され、或るMCDから1つのカテゴリーが、その母集団の第1の成員をカテゴリー化するのに用いられるならば、同一のMCDの他のカテゴリーが、その母集団のさらなる成員をカテゴリー化するのに用いられ得るという規則である。さらに(2)の系として“聞き手の格律(hearer's maxim)”が挙げられる。即ち、2つ或いはそれ以上のカテゴリーが或る母集団の2つ或いはそれ以上の成員をカテゴリー化するのに用いられるならば、それらのカテゴリーは、同一のMCDからのカテゴリーとして聞かれ得る、という格律である。(Sacks〔1972: 332-333〕)「赤ん坊」という成員は、経済規則によって、例えば“家族”というMCDや“人生の段階”というMCDのカテゴリーとして聞かれ、“野球”というMCDとは関連なきものとみなされる。さらに、一貫性規則、特にその系である“聞き手の格律”によって「赤ん坊」と「ママ」が同一装置(“家族”)の中の異なるカテゴリーとして聞かれる。(図A参照)

さらにMCDの中心的特性として、Sacksは、“MCDは複合的に組織化される(duplicatively organized)”と述べる。つまり或る装置が母集団に用いられるとき、装置は諸カテゴリーをとり出し、そのようなカテゴリーのセットが一つのユニットを限定するものとして扱い、母集団成員をユニットの各々の場に配置する。そして成員は、各自の場においてユニットを構成する共同責任者(coincumbents)となる。(Sacks〔1972: 334〕)(図B参照)つまり、カテゴリーは単に成員を区分けする枠ではなく、特定の活動、知識、権利、義務等を付随していることになり、⁽¹²⁾故に「赤ん坊」と「泣く」そして「ママ」と「抱き上げた」がそれぞれ結びついて聞こえるのである。

我々が先述の文章を“泣いた「赤ん坊」を、



その母親である「ママ」が抱き上げている」と聞き、発話の「正しさ」を認知するのは、このようなMCDを我々が用いているからである。特に装置構成の中心的特性という事実から、「赤ん坊」と「ママ」が密接に関連しあい、同一装置内で、装置自体の維持に共同責任をもつ成員をカテゴリー化するのである。しかし、この事実に加えて、記述の「正しさ」を認知する際、我々は「母親は彼女の泣いている赤ん坊をなだめようとするべきである」という「規範」を用いており、その「規範」使用自体が、この「正し

さ」と reflexive な関係にある。つまり我々は、発話を聞き活動を見る際に、或る「規範」が適切である諸々の発話や活動の実践者を同定するのにレリバントな成員カテゴリーを与える為に当の「規範」を用いるのである。

成員のカテゴリー化は、日常生活者の現実構成や世界の分節化にとって最も核心的な過程であるが、このようなMCDは、Sacks自身も述べている様に、発見的な性質をもつものであり、完成途上にある装置である。さらなる分析により、装置の洗練が可能である。

4. まとめ

—エスノメソドロジーの実践に向けて—

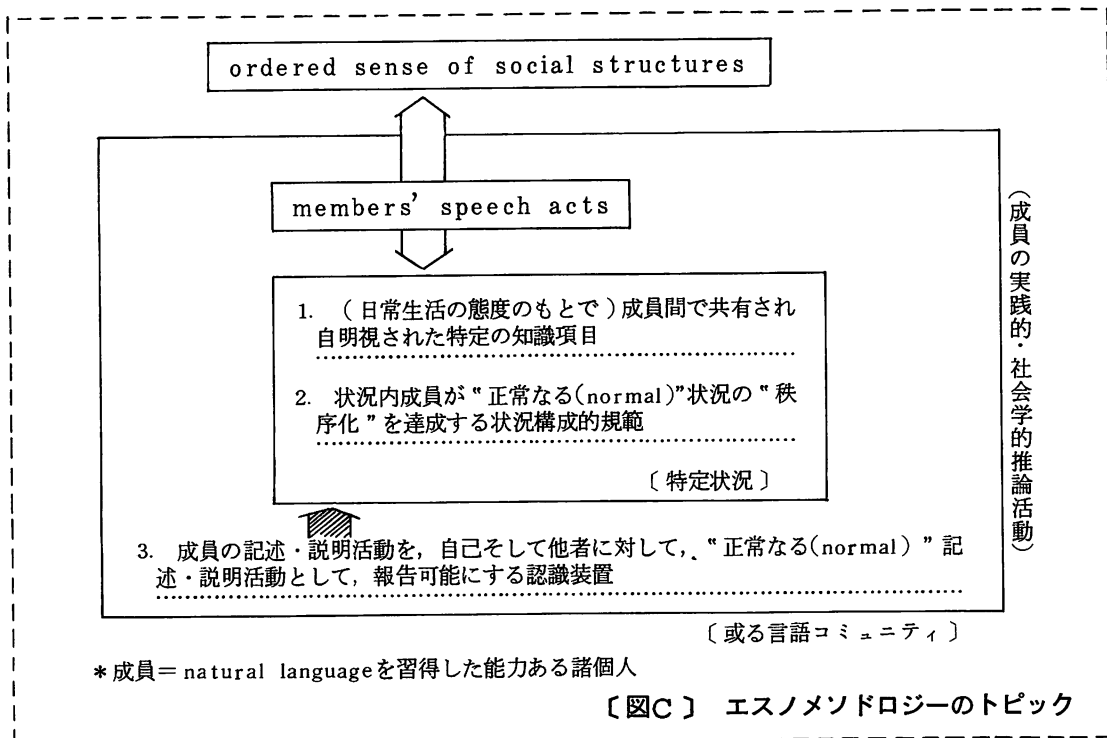
前章で呈示されたエスノメソドロジーの3つのトピックは、それぞれ日常生活における成員の実践的推論活動の三位相に接続する。日常的諸活動の有意義性は、我々が普段、日常言語を“意味ある言葉”として聞き、理解し、語るための諸装置の使用を通して初めて保証される。このような装置使用は、一定言語社会の成員に対する最も不変的、全域的な“規範”と言える。成員の日常言語使用が獲得、維持されたうえで、特定状況の“社会的事実”性が、成員間での発話行為を通して生成される状況構成的“規範”によって、常に reflexive に達成される。(成員と状況が常に相互に反映し合い、そこで生み出される諸々の意味が、それぞれに回帰して初めて“状況固有”の意味として立ち現われるという意味で reflexive である。)そして、このような“規範”は、成員間で暗黙の裡にコード化さ

れており、そのコード自体或いはコード使用に付随する諸々の知識の定式化が可能であり、それが Psathas & Henslin, Ramos らの「実践的知識項目の抽出」作業である。

エスノメソドロジーのトピックを成員の実践的推論活動の三位相と照合して図示すると図Cのようになる。

端的に言えば、エスノメソドロジーは、日常生活者が達成しつつある「社会構感」と全域的規範(自然言語の認知装置)－局域的規範(状況構成的諸規範)との具体的関係性を探究者と調査実践対象(実は探究者自身も調査実践の対象であるが)との二人称的交信活動を通して探究する営為なのである。そして直接的なデータは、実践的推論活動の現象的呈示である日常的会話、会話的相互作用を通じた“語り合い(discourse)”である。

さて、本論考では、エスノメソドロジー的分析内容の紹介・整理に努めた。この作業行程の



中で、当然ながら、様々な疑問、課題が生ずる。“エスノメソドロロジーの背景にある科学哲学の問題”“記号論的分析との関連性”“従来の社会学の「状況規定」問題とエスノメソドロロジーの関連性”“小集団論或いは準拠集団論との関連性”“「会話分析」と言語学、特に発話行為論との比較”等々。これらの問題はエスノメソドロロジーを“一つの学”として位置づけ、一般理論構築をめざすうえで、一つ一つ解いていくべき課題である。だが、エスノメソドロジストにとって、これらと等しく重要なのは、“エスノメソドロロジーを如何に実践するのか”という課題である。エスノメソドロロジーは、フッサールの“現象そのものへ還れ”の要請を文字通り実践する社会学的営為であり、これによって初めて日常的諸現象が、それ自体探究する権利のあるものとして社会学の対象になった。組織、集団内で、成員固有の共同現実構成に用いている“集団内カテゴリー”そして、そのカテゴリーに付随する規範の問題、日常生活者の深層意識に遍在する差別観念とその現象的呈示である差別的言動との関係性、日常的葛藤状況処理する様々な儀礼行動の抽出、或いは集団、組織内での権力現象の日常的様相等は、生活場面での様々な“できごと”の沸騰状況に直接参与し、解読することで初めて見えてくる問題群である。言わば、生活者が「世間」に準拠し、“日常性”を維持する上で達成されている様々な“秩序化”の様相を、そしてそこに孕まれる諸矛盾を探究するのに、エスノメソドロジック的アプローチは有効である。

筆者自身、或る“出会い集団”における“秩序化”実践のエスノメソドロジック的接近を試行した。(好井裕明〔1982〕)そこでは、理念的には、各参加者が、自分の体験を素直に自分の言葉で語り合い、聞き合うことを通して、“今一

ここ”で語っている自分に気づき、過去からの自己を拘束する諸々の“常識”“枠”から自分を解放することをめざす。さらに、同様な他者との充実した出会いの中で常に“今を生きる”自分の確かさを実感し、自己変革をめざすのである。そして、自分の体験を語るという点で、本質的に各参加者間の“階層性”は消失し、権力が均等に配分されることになる。しかし、現実の場面では、調整者(主催者)が、展開する話題、発話権を集中管理し、各参加者へ適切に配分するという権力現象が見られた。さらに人為的な“笑い”“微笑”が、場面の緊張緩和に機能したり、“今を生きる”というコードを現実的に語ることで、場面の話題展開に対する究極的な意味付けに用いられることが見出された。⁽¹³⁾このような“秩序化”実践は、集団の理念に反し、集団自体、合目的に機能していないと判断を下すことは容易であるが、そうするのではなく、この実践自体を新たなデータとして、参加者が行なう集団に対する意味付与を考察すべきである。いずれにしても、このような“秩序化”は、成員の実践的推論活動それ自体を対象としなければ見えないものである。

実践への志向を忘却し、エスノメソドロロジーについてのみ研究する者は、“現場の学”という意味を欠落させ、エスノメソドロロジーを単なる“書斎の学”におとしめる危険性をもつ。MehanとWoodも述べている様に、エスノメソドロロジーは、常に生活現場との交信を通して或立する営為であり、文字通りの“日常生活の社会学”なのである。(Mehan & Wood〔1975b〕)

最後に、筆者自身のエスノメソドロジック的調査実践に向けての方法的手続きを少し述べておく。(勿論、これは、扱う問題性格を通して修正変更されるはずである。)⁽¹⁴⁾

1. 特定集団成員の実践する“語り合い”の場

を選定する。

2. 調査者は、単に調査者として状況を参与観察するのではなく、或る役割を担う一人の付加的成員として、状況に参入する。つまり、彼／彼女の発話・行為も“秩序化”実践として考えられ、探究対象となる。
3. 特定集団成員による“秩序化”は、或る程度の集団固有の知識の構造化⁽¹⁵⁾を前提としており、成員は“秩序化”に伴って、その構造化作業を行っている。故に、成員の“規範”使用を記述するには、まずこの知識項目の抽出、構造化作業自体に焦点を合わせる必要がある。
4. 成員の活動にとって関連のある(relevant)語い(カテゴリー)を「現地」で採集する。その際、Ramosの言う“自然的に生起するトラブル”に注意し利用する。そして、そのカテゴリーの周辺に集まる関連語いの配置図を作成する。「現地語」の採集、関連語いの配置図作成は極めて重要である。何故なら、これを怠ると、例えば運動集団の場合、何らかの教条主義的政治言語の背後に隠れた生活者としての成員自身の「社会構造成」達成の生活語い、カテゴリーを見逃し、彼らの運動実践、階級闘争の様相を見失ってしまうからである。
5. 生活カテゴリーは、成員の日常的諸活動と分離して作成されるものではない。それらは、成員の活動を説明し、活動を通して意味付与される“生きられた(on-going)”知識である。Sacksの「カテゴリーに結びついた活動(category-bound-activities)」の考え方(Sacks〔1972〕)をとると、それぞれのカテゴリーに密接に結びついた活動が存在することになる。すると、カテゴリーの配置図を参照しつつ、そのカテゴリーの発話行為に注目

し、カテゴリーに結びついた実践的活動を記述する可能性が生ずる。

6. このようなカテゴリーと活動との結びつけは、“規範”の使用を通して行なわれるが、この“規範”内容を状況の特有物(indexical particulars)を用いつつ、再構成する。このような“規範”使用の記述は、成員の“秩序化”実践の記述であり、ethnomethodographyなのである。

〈注〉

- (1) エスノメソドロジーは、一言で言えば、A.シュッツ以後の「現象学的社会学」の流れの一分肢であり、「現象学的」発想と実証主義的分析の接合をはかる社会学的探究である。シュッツは、彼の議論の中で、「日常生活世界」それ自体に存る論理に注目し、伝統的社会学的理論化が自明視してきた、「常識」の社会学的意味を明示した。彼は、「日常生活世界」のモデルを呈示したが、あくまでモデルの呈示であり、そこには現実の日常生活者の実践的諸活動との交信はない。シュッツが展開した「多元的現実」論、「限定された意味領域」の問題は言わば、静態的な意味世界の構造が中心である。諸現実と行為との連関や、複数現実間での移行と言う動態的な意味生成・変動過程は、「レリバンス(Relevance)」問題として後期に展開されるが、不十分なままである。エスノメソドロジーは、現実の場面で生活者が、如何に意味を達成(accomplish)していくのかを、読みとることを通して、この動態的な過程の解明を志向する営為である。(“シュッツからエスノメソドロジーへ”という問題は、筆者自身、稿を改めて論じたいと考えているが、山崎敬一がこの問題を扱って論じている。)(山崎敬一〔1982〕)
- (2) 山田富秋の訳を採用。
- (3) 北沢裕の訳を採用。

- (4) 加藤春恵子〔1981:172-191〕を参照。
- (5) 他にも、アメリカン・プラグマティズム、後期
ヴィトゲンシュタイン哲学等の影響がみられる。
エスノメソドロジーの哲学的背景に関しては、稿
を改めて論じたい。
- (6) 例えば、差別言動に関係する深層差別意識を解
くには、日常生活者の“支障のなさ”を維持する
社会構造“感”，つまり「世間」が如何に達成さ
れるのかを徹底追求する必要がある。
- (7) この語はCicourelの用語であるが、彼は、社
会構造に関する知識獲得が、社会化の過程で如何
に行なわれるのかに関心を抱いている。(Cicourel
〔1971〕)本論考では、日常生活者が、無反省的
に所有する社会構造に関する知識体系であり、所
謂“普段我々が「世間」でイメージするもの”を
表わすことにする。
- (8) 我々が普段行なう発話・行為から、非日常的な
運動実践まで含めた、生活者の営為全体をさす。
- (9) 例えば、「本郷三丁目、富士銀行、通用門」と
いう指令は、ABC型である。
- (10) エスノメソドロジーに対する批判として、「社
会構造の忘却」が言われるが、これは誤りである。
(2)のアプローチでは、状況構成する人々の装置を
解釈する為に、戦略的に探究対象の限定を加えた
だけであって、決して外在的客観的な諸社会構造
を忘却している訳ではない。このアプローチで抽
出された装置と、より外在的な構造や、歴史的(生
活史的)諸要因との関連を問うことは可能であり、
それ自体エスノメソドロジーの探究課題である。
また、次に述べる「会話分析」では、“生活者同
士理解可能な言葉を語り合い得るのはどのように
してか”を問うとき、既に、一定言語に組み込ま
れた社会性、言語的社会構造を想定しており、決
して社会構造を忘却している訳ではない。
- (11) 「会話分析」に関しては、別稿で集中して、そ
の有効性・限界性を論ずる予定である。
- (12) 例えば「家族」というMCDは、父親、母親、
長男、長女、次男…の категорияが並列的に構成
されるのではなく、各々のmcが、特定の活動、
知識、権利、義務等をもったものとして共同的に
「家族」を構成する。我々は普段「家族」という
MCDをこのように用いており、父親や母親がい
ない家族を、父親や母親が欠けた家族と見たりす
るのも、このMCD使用の故である。
- (13) より詳しくは、好井裕明〔1982〕を参照。
- (14) 筆者自身、差別現象(性差別、部落差別、民族
差別、障害者差別)へのエスノメソドロジーの適
用を考えており、その有効性の検討、調査実践も
行なう予定である。
- (15) 集団内では、成員間で、日常的出来事を処理す
る表層的な「処方的知識」から、集団のアイデン
ティティを維持する上で、機能する価値や、より
深層にある信念に関する知識まで、いくつかの知
識の構造化が考えられる。この点に関しては、A.
ギュルヴィッチの議論が参考になる。(Gurvitch
〔1950=1970〕)

〈参考文献〉

- Bittner, Egon 1967 "The Police on Skid-Row" American Sociological Review 32-5 : 699-715
- Cicourel, Aaron V. 1971 "The Acquisition of Social Structure: Toward a developmental sociology of language and meaning" Douglas, J.D. (ed.) Understanding Everyday Life: 136-168 RKP
- Cicourel, Aaron V. 1973 Cognitive Sociology Penguin

- Cicourel, Aaron V. 1980 "Language and Social Interaction: Philosophical and Empirical Issues" Sociological Inquiry 50-3/4: 1-30
- Douglas, Jack D. (ed.) 1971 Understanding Everyday Life RKP
- Garfinkel, Harold 1952 Perception of the Other Unpublished Ph.D. Dissertation Harvard Univ.
- Garfinkel, Harold 1967 Studies in Ethnomethodology Prentice-Hall
- Garfinkel, Harold & Sacks, Harvey 1970 "The Formal Structures of Practical Actions" McKinney, J.C. & Tiryakian, E.A. (ed.) Theoretical Sociology: 337-366 Appleton-Century-Crofts
- Gurvitch, Georges 1950 La vocation actuelle de la sociologie. Vers une sociologie differentielle P.U.F. = 1970 寿里茂訳
『社会学の現代的課題』青木書店
- 加藤春恵子 1981 「エスノメソドロジー」安田三郎他編『基礎社会学』第Ⅱ巻, 東洋経済新報社
- 北沢裕 1982 「エスノメソドロジーの成員活動に対する開放項概念とく推論」『社会学年誌』第23号, 早大社会学会
- Leiter, Kenneth C.W. 1980 A Primer on Ethnomethodology Oxford
- Mchugh, Peter 1968 Defining the Situation The Bobbs-Merrill
- Mehan, Hugh 1974 "Accomplishing Classroom Lessons" Cicourel A.V. (ed.) Language Use and School Performance: 76-142 Academic
- Mehan, Hugh & Wood, Houston 1975a "An Image of Man for Ethnomethodology" Philosophy of Social Sciences 5: 365-376
- Mehan, Hugh & Wood, Houston 1975b The Reality of Ethnomethodology John Wiley & Sons
- Pollner Melvin 1974 "Mundane Reasoning" Philosophy of Social Sciences 4: 35-54
- Pollner Melvin & Zimmerman Don H. 1971 "The Everyday World as a Phenomenon" Douglas, J.D. (ed.) Understanding Everyday Life 80-103 RKP
- Psathas, George 1968 "Ethnomethods and Phenomenology" Social Research 35-3 : 500-520
- Psathas, George 1980 "Approaches to the Study of the World of Everyday Life" Human Studies 3: 3-17
- Psathas, George & Henslin J.M. 1967 "Dispatched Orders and the Cab Driver: A Study of Locating Activities" Social Problems 14-4: 424-443
- Ramos Reyes 1972 The Production of Social Reality: An Ethnomethodological Study of Making the Trouble Ph.D.

- Dissertation Colorado Univ.
- Ramos Reyes 1979 "Movidas: The Methodological and Theoretical Relevance of Interactional Strategies" Studies in Symbolic Interaction 2: 141-165
- Sacks, Harvey 1972 "On the Analyzability of Stories by Children" Gumperz, J.J. & Hymes, D. (ed.) Directions in Sociolinguistics 325-345 Holt, Rinehart & Winston
- Sacks, Harvey, Schegloff, E.A. & Jefferson, G. 1974 "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation" Language 50: 696-735
- Sacks, Harvey 1979 "Hotrodder: A Revolutionary Category" Psathas, G. (ed.) Everyday Language: 7-14 Irvington
- Schegloff, Emanuel A. 1972 "Sequencing in Conversational Openings" Gumperz, J.J. & Hymes, D. (ed.) Directions in Sociolinguistics 346-380 Holt, Rinehart & Winston
- Schegloff, Emanuel A. & Sacks, Harvey 1973 "Opening Up Closings" Semiotica 8: 289-327
- Schenkein, Jim (ed.) 1978 Studies in the Organization of Conversational Interaction Academic
- Sudnow, David (ed.) 1972 Studies in Social Interaction Free Press
- Wieder, D. Lawrence 1974 Language and Social Reality Mouton
- 山田富秋 1980 「解釈パラダイム再考——エスノメソドロジー理解への指標——」『社会学年報』Ⅷ, 東北社会学会
- 山田富秋 1981 「エスノメソドロジーの論理枠組と会話分析」『社会学評論』125号
- 山田富秋 1982 「言語活動と文化的相対性——エスノメソドロジーの自然言語をめぐって——」『社会学研究』第42・43号
- 山崎敬一 1982 「常識的カテゴリーと科学的カテゴリー——シュツとエスノメソドロジー」『社会学年誌』第23号
- 山崎敬一 1983 「社会的行為論とエスノメソドロジー——社会的行為における規則とレリバンス——」『ソシオロギス』№7
- 好井裕明 1982 「エスノメソドロジーの実践可能性——エスノメソドロジーにおける“状況”について——」第55回日本社会学会大会報告要旨(これは報告の場で配布したものです。)

(よしい ひろあき)